
真夜中の交差点

大沢 綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夜中の交差点

【Nコード】

N7531M

【作者名】

大沢 綾子

【あらすじ】

高校生の萩生彰ハキオアキラは、どこにでもいる普通の高校生。恋愛対象は女の子だったし、成績も普通、クラスでもあまり目立たなくてむしろ地味。しかし彰には部活帰りに通り過ぎる美術室で、かならず目にする同級生が気になっていた。

プロローグ（前書き）

古い作品しかアップできませうん。ゴメンナサイ。

これは、「愛を描く部屋」よりさらに古く、初稿が1996年。

改稿が2007年 そりゃもう、下手さかげんに頭が痛くなつて
しまいますよ。

プロローグ

萩生彰の、いちばん最初の父親の記憶は、鮮烈だ。

抱きあげた大きな手と、あたたかい腕にきつく抱きしめられて聞いた声。

「ああ……小さいなあ」

ふるえる声に、涙がにじんでいた。

幼いころにも、その声にこめられた何事かを感じることができなかった。

母親の腕のなかとはまた違う、巨大な安心感につつまれた。

そのあと、仕事を終えた母親が迎えにくるまで、ずっと遊んでもらっていた。積み木くずしや、鬼ごっこや、肩車を、飽くことなく繰り返して、上機嫌だった。

つるべ落としに陽がおちたところに迎えにきた母は、一瞬その情景に凍りついて……駆け寄る彰にも気づかなかった。

母の脚にしがみつきながら彰は、大腿に近づいてきた男に抱き寄せられて静かに泣く母のすがたを見上げていた。

あれほど綺麗で、たおやかな母を見たのは初めてだった。

かれがまだ、四歳の、秋たけなわの夕焼けのなかのこと。

この季節になると、彰はいつもその情景を思い出す。

ときには、夢に見る。

目覚ましが鳴るまえに、その夢のせいで自然に目が覚めていた。

朝夕はすこしひんやりとして、布団のなかで小さくくしゃみをする、もう一度ぬくもりのなかにもぐりこむ。

台所のほうでは、もう、母親の由紀子が起きだしている気配がし

た。

彰にはまだ、夫婦のことも、大人の男女のこともわからない。四歳からのおよそ十三年間をふつ々の親子として暮らした父親は、この家を出ていった。

それより前から、何週間もまともに帰ってこなかった。

彰からいえば祖父にあたる男が、脳卒中で斃れてしまったからだ。いまでもたまに連絡だけは入るが、おそらく本家のあの広大な日本家屋は上を下への大騒ぎなのだろう。

彰にとっては、別世界の出来事だ。

だが、彼の父親である北条貴之は、そういう世界の住人だった。

幼いころから、由紀子にずいぶん教えられてはきたけれど……実感がなかった。

由紀子が、頑として籍をいれなかったのも、北条が日本有数の企業の跡取りだったからだ。彼女は、いずれこういう刻がくる、とわかっていたみたいだった。

だが、彰はもちろん北条自身もそんな事を考えてもいなかった。

北条自身は、父親から縁を切られたときに「捨てた」つもりだった。

父親の系列会社を辞めて仕事を変えて、そこそこの地位にまでついて……北条はもう四十の半ばを越えている。

そこへ、いきなりかかってきた一本の電話が、彼らちいさな家族の運命を変えてしまった。

父親を、蹴りだすようにして病院に行かせたのは、由紀子だ。

もともと、あきれられるぐらいに気丈で、その辺の男よりも一本筋がとおっていて、下手をすると高校生になった彰でも、殴りとばすくらい鉄火な女だ。そのくせ、芯はとても情にもろくて、やさしすぎるぐらいに、やさしい。

そのやさしさが出した結論を、彰はなかなか受け入れられなかった。心のどこかで……彰は父親がすべてを片づけて、戻ってくると思っていた。

しかし、もうすぐ二か月になる。さすがに、彰も事態が個人の想いやちからではどうにもならない事を悟っていた。

ゆうべ由紀子は、テレビを見ていた彰を呼んで言っていた。

「あなたは、彼についていきたい？」

「いきなり、なんだよ」

インスタントのコーヒーをいれながら、由紀子はこわいほど真剣に彰を見ていた。

母親がこういう顔をするときは、必ず容易ならぬ言葉がとびだす。

「彼はたぶん、戻ってこられないと思うわ。彼自身の気持ちよりも周囲の状況がそれを許さないと思う。あの人の性格だもの、仕方がないけど……でも、貴方には選択肢があるのを、覚えておいて。もっと大人になってから自分で決めればいいと思うっていたけど、いまこんな状態だから、考えて。彼が認知している以上、あの家の事情からは逃れられない。一生、無縁ではいられないから」

なにも、こんなときに言わなくても、と正直かなり重かった。

思わず、大人びた溜息がでた。

「俺はこどもの頃、父親は生きてるけど……会えない、って思いこまされてたよね」

ちよつと、由紀子が視線をそらす。

彼女にとってそれは、後ろめたい過去だった。

若いころの身分違いの恋に、勝手に身をひいて姿を消し、黙って彰を生んだのだ。

「でも、父さんは俺たちを探して……見つけた。いまでも、覚えてるよ」

北条貴之のもつ、いい意味でのしつこさについては、彰たちがいちばん良くわかっていた。彰でははかれないほどの、器をもっている男だ。

「たぶん、諦めてるわけじゃないと思うよ。時期がくれば……また、一緒に暮らせるようになると思う。それまでは、単身赴任とでも思

「っておかないかな」

「彰がそう言うと、由紀子のほうが目が覚めたような表情になっていた。」

「彰ったら……」

「はあ、と顔を覆ったてのひらの中に息を吐く。」

「そうね、いい考えだと思う」

「にっこり笑う母親に、彰は大人っぽい微笑を刷いていた。」

？

萩生彰は、ごく普通の、どこにでもいる高校生だった。

地味な存在だといっていいくらいだ。

適当に成績がよくて、適当に手をぬいて、適当に友人がいる。

とにかく先頭にたつて、何かをするタイプではない。

かといって、その存在をクラスメイトに忘れられるほどには、影がうすくもない。

何となく、とらえどころのない存在だった。

通学電車のなかで、ドアの傍に背中をあずけて立っている彰をみて、宇田川保はその図抜けた長身を移動させていく。

前に立つと、声をかけていた。

「よお、大丈夫か？」

「宇田川か」

見上げて、ウォークマンのスイッチを切ると、ヘッドフォンを外す。

宇田川と彰は、中学からの腐れ縁だ。

むかしは、互いの家によく泊まった。

彰は、宇田川にだけは父親のことを話してあった。

「まあ、とうぶん不在だと思うよ」

「はやく、ゴタゴタが片付くといいな」

口元だけで笑う友人を、180を超える長身で見おろして、宇田川ははっとする。

それほど、大人びた表情だった。

彰は、全体的にシャープで、甘さのない整った顔立ちをしていた。父親のことがあってからは、そこに憂愁の影がおちるようになって、陰影が増したような気がする。

気がつくくと、彰が眉間にうすい皺をよせて宇田川を見上げていた。

「おまえ、また背がのびたろう」

「ああ、182」

「うわっ、気にいらねえなあ」

彰も175はあるし、日本人の平均からいえば、そんなに低いわけではない。それでも車内の天井を突き破りそうな宇田川にかかれば、見上げるしかない。

「俺も、バスケにしときゃ良かった」

「そうかあ？ 俺は、おまえの道着姿が好きだけどな」

言つて、足元にある道着袋を顎でさす。

彰は、中学のころからずっと、合気道をやっている。

たまたま、高校にもあったからそこに入部したのだが、せめて部活ぐらいは他のものにしておけば良かったと、近頃おもう。

「お前のところが、羨ましいよ。いつも、賑やかでさ」
ぼつり、と言つ。

宇田川のところは子沢山の家庭で、長男の宇田川を先頭にして下に四人も弟妹がいる。祖父母同居のうえに両親が共働きで、宇田川は小学校五年で末の妹のおしめを替えていた。

そんな家庭だから、彰が泊まりにいつても子供がひとり増えたくらいにしか思わず、せいぜいコキ使われた。

「俺は、お前のとこのほうが羨ましいぞ。なんといつても、プライバシーの尊重があるだろうが」

寂しいのだろう、と宇田川は思った。

彰の父親は、黙っていても存在感のある男だった。

格好がよくて、人間が暖かくて、普段くたびれた父親を見ている宇田川は、はつきりいつて懂れている。

巨大な不在感があつてあたりまえだ。

そつと、彰のほうへ身体をかかめると、耳元でひくく言う。

「おまえ、朝いもうとが起こしにきてよ、俺の元気なナニを指さして、お兄ちゃんこれなあに？ なんて言われてみるよ。はつきりい

って、げんなりするぜ？」

彰は、たまらず吹き出していた。

「俺も、それは勘弁！」

「だろ？ 切実に個室がほしいよ。二段ベッドは狭くてかなわねえしよ」

やっと、笑顔がもどっていた。

肩を震わせて笑っている彰を見下ろして、宇田川は満足そうに微笑んでいた。

昼休みに、学生食堂からもどる途中で彰は「かれ」を見つけていた。

むこうは自分を知らないだろうが、彰は一年のときから知っている。

湊悠一……進学クラスの委員長だ。

合気道道場から校門へむかう途中に美術部の部屋があつて、放課後かならずその部屋に湊悠一がいた。

最初の頃は、華奢なやつがいるな、という程度の認識しかなかった。

それがだんだん気になり始めて、最近ではその部屋にかれがいないと物足りないほどだ。

色のしろい、繊細なつくりの顔立ちに銀縁めがねをかけていて、絵筆よりほかに重いものは持ったことなどないようにほっそりしている。

その彼が、いまは分厚い冊子の束を抱えて、そろそろと階段を下りてくるところだった。

(あぶねえ)

そう思った瞬間、頭上から地響きのような足音と賑やかな声が団子になって響いてきて、彰はとっさに身構えた。

どん、と「かれ」が押されたのが見えた。

冊子が空をとんでいき、それをかいくぐるように二、三段のぼると、彰は片手で手すりをつかんで、あいた腕でかれを抱きとめていた。

どしん、と体重が腕一本にかかる。

めがねが、飛んでいくのが眼のはしに見えていた。

「大丈夫か」

声をかけると、ふう、と息をはいて彰のほうに向いていた。

「……助かった」

階段の下では、下級生の集団がバツが悪そうに固まって見上げていた。こそつと逃げだそうとする数人を彰が目ざとく見つける。

「逃げるな！」

一喝していた。

びいん、と腹にひびく声に、悠一までがびくり、と固まってしまふ。

怒鳴られたほうは、男女混じって石像と化していた。

「拾えよ」

散らばった冊子を顎でさす。

はじめられたように、彼らは廊下に膝をついて拾い集めた。

彰は悠一からはなれると、彼の眼鏡を拾っていた。ちよつと歪んでいるようだが、割れてはいなかった。

「ほら」

手渡されたメガネをかけて、悠一はやっと相手の顔をはっきりと見る。

覚えがあるような、ないような。

詰襟の襟章を確認していた。

【 ？ - - C 】

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

怒鳴った人物とは思えないほど、やさしい微笑が返ってきた。

が、下級生たちが集めた冊子を渡しにくると、その微笑は消えて

いた。

「あの……すいませんでした」

「おまえら、いつまで中学生のノリでやってんだ。悪ふざけもたいがいにしろ」

大きな声ではなかった。

むしろ、低くおさえられていたが、そのほうが怖かった。

「も、もういいよ。怪我なかったし……」

なんだか、悠一のほうが済まない気がして、とりなしてしまっていた。

それへ、器用に片方の眉だけあげて何か言いたそうにする。

「が、まあいいか、と閉じた。

「だとさ」

下級生を解散させてから、彰はその冊子を半分預かってやった。

冊子は、視聴覚室で行われる予定の英語のヒアリング教材だった。大丈夫というのに、相手は軽々と冊子を抱えて教室まで届けてくれた。羨ましいぐらいの腕力だ。背も、じぶんよりも高かった。

教壇のうえに冊子を置いて、黙ってでていこうとするから、悠一は慌てて声をかけた。

「あの！ ぼく、？ - Aの」

「湊悠一、だろ……知ってる」

返ってきたのは、おもわず見惚れてしまうような笑顔だった。

ドアを閉じて……じぶんの教室へと戻りながら、彰はやっと気がついていていた。

恋をしている。

一年以上も、ただガラス越しに見つめる恋をしていた。

初めて、かれを間近に見た。

長いまつげに縁取られた茶色の瞳は、夢見るように潤んでいた。腕にのこる、かれの感触が熱くて……灼けつくようだった。

(うかつだったな……)

まさか、じぶんの気持ちがそういう類のものだとは、思ってもみなかった。

嫌悪感や不安よりも、彰が気になるのは自分は、女も好きだという事のほうだ。

中学の三年の秋ごろから、高校一年の春のおわりまでつきあった相手は、ちょっと気のつよい綺麗な子だった。拗ねるのがうまくて、彰はメロメロに甘やかしていた。

夜中にメールがはいつて、自転車をとばしたこともある。

親にだまって抜け出して……冬のさなかに公園のベンチで震えながら、缶コーヒーをのんだりもした。

互いの環境が変わって、自然消滅したような形だったが、それでも本当に好きだったと思う。

それが、今度はいきなり男となれば、じぶんでも首をかしげてしまふ。

本物なのか、どうか。

ただ、彼を抱きとめた瞬間にじぶんの心臓を貫いた電流のような衝撃は、気のせいではなかった。

どつりで……と彰はこころの中でじぶんを笑う。

どこかで名前や噂をきくたびに、気になっていたはずだ。

恋するものの切なさで、全身がアンテナのようになっていた。

(けど、男あいてにどうしろってんだろうな)

こればかりは彰も、どうすればいいのかわからなかった。

悠一は、授業が終わってすぐに、？の教室をのぞいていた。

授業中もずっと、気になってしかたがなかった。

じぶんは誰かも知らないのに、相手はこつちを知っている、というのは妙に居心地の良くないものだ。

教材の回収を副委員長にたのんで、視聴覚室をとびだしていた。

人づきあいが下手なことを自覚している悠一は、本来ならじぶんなんかが委員長になるわけがないとわかっている。進学コースは皆じぶんの事で忙しくて、ていよく押しつけられたようなものだ。

一年生のときから進学コースを選択する連中は、全員国立の一流大学狙いで、自然とほかのコースとの付き合いは疎遠になる。

ドアからのぞいても、悠一は誰に声をかければいいかわからなかった。

目的の相手はすぐに見つけた。

窓際に数人固まっているなかにいた。

ポケットに両手をつっこんで、楽しそうに喋っていた。

じぶんのクラスとは、女子も多いし、あきらかに雰囲気がちがつているのを実感する。

(どうしよう……)

呼んできて、と言いたくても肝心の名前を知らない。

勇気をだして、中にはいつていこうか迷っていると、むこうが顔をあげていた。

目が合って……大股に近づいてきた。

「なんだ……？」

ドアに手をついて、すこしだけ見下ろされる。

驚くほど、やさしい眼をしていた。

「俺に、用か。それとも、誰か呼ぶか？」

「き、君を探してたんだよ」

「なんで？」

「気持ち悪いんだよ。僕の名前だけ知られてる、ってのが乾いた笑い声が降ってきた。

「そうか……萩生、萩生彰だ。これでいいか？」

いい、という風に悠一はうなづく。

やっと、気持ちが落ち着いたような気がした。

「さっき、本当にありがとう。手の骨でも折れてたら、おおごとだった」

「ノート取れないもんな」

「うん……まあ、それもだけど」

なんとなく、言いよどむ。

悠一にとつての関心事は、勉強ではなく部活のほうだ。

「絵筆が握れなくなる？」

言われて、驚きに目をまるくした。

「種あかしをしようか」

彰はドアにもたれかかって、両手をポケットにつっこんだ。

「俺、合気道部にいるんだよ……部活終わって帰るときに、必ず美術部のそばを通る。いつも、最後まで部室にいるだろう。進学コースの連中っていうのは、一般クラスじゃけっこう知られてるんだぜ。英語部とかならまだしも、美術部っていうのが珍しかった」

「好きなんだ」

言った瞬間、相手がまるで怯んだように見えて、不思議におもった。

なにか、おかしい事をいつてしまったのだろうか。

ちょっと不安になったところへ、始業チャイムが鳴っていた。

「戻んなきゃ」

「ああ、じゃあな」

いそいで背中をみせる悠一を見送って、彰はくるしいような表情をした。

とどめの一発を撃たれた気分だ。

(まいったな……俺は、本気だ)

悠一がいった「好きなんだ」という言葉に、見事に反応した。

心臓がはねあがって、鼓動がはやくなっていた。

あのセリフを、いつか自分相手に言わせてみたい、と本気で思った。

彰はまだ、彼のことを何も知らない。

知り合っていく時間があるだろうか、と思いながら席にもどる。

椅子をひいて座ろうとしていたら、後ろの席の宇田川と眼があっ

た。

宇田川は、奇妙な眼をしていた。

「なんだよ」

「いや、あいつAクラスの委員長だろう。何の用だったんだ？」

「たいしたことじゃないよ」

教師が入ってきて、その会話はそれきりになった。

？

放課後、部活がおわると彰は必ず美術部の部屋をのぞく。そして、窓ガラスをコツコツと叩いて悠一の注意をひく。

あれ以来、そうすることが日課になっていた。

ときには悠一のほうが早めに後片付けを終えて、窓から顔をのぞかせている事もあった。

その日は、悠一はまだ絵筆を握っていた。

「萩生、もう終わったんだ」

「湊はまだみたいだな」

窓から首をつつこんで、人気のない部室を見まわしていた。

「はいる？」

「うん」

ぐるりと校舎をまわって、部室にはいった。

部屋のなかには、木炭とテレピン油の匂いが充満していた。

「もうちょっと、キリのいいとこまでやりたいんだけど」

「いいよ、待ってる」

勝手に椅子をひきだしてくると、そこへどっかり腰を降ろして組んだ脚を机にのせていた。ウォークマンをセットして、文庫本をひらく。

描いているところを見られるのが苦手な悠一に、配慮してのことだ。

一か月かかって、やっとここまでこぎつけた。

本気だと気付いてからの彰は、こまめに接触をした。廊下ですれちがうときに声をかけたり、部室をのぞいたりを繰り返した。

最近やっと、一緒に帰れるようになった。

おんなが相手なら、ここまで悠長にはやらない。

だが、あいてが同性だとそれだけでもう、高い障壁が目の前にあるのは一目瞭然だ。急いで、何もかもをぶちこわしにしたくなかつ

た。

それに、彰自身もまだ戸惑いはある。

本気なのはわかってはいるが、さあ女の子のときのようになんか自分ができるかどうかまでは、正直わからない。

だから、まずは友人になるところから始めてみようと思ったのだ。

本を読むふりをしながら、彰はそつと悠一の横顔を眺める。

教材用の頭部の石膏像を、悠一は描いていた。

なぜか、ななめ後ろからの絵だ。

(なんで、正面を描かねえんだろうな)

使っている絵の具は、白と灰色と黒と青……逆に難しいとりあわせにも思えた。背景も青白い感じで、これから冬になるといっついに寒々しい絵だと思う。

(おなじ白でも、もうすこし暖かいのにすればいいのに)

やっと、悠一が納得して絵筆を置き、片付けを手伝って校舎を出ながら、そう聞いてみた。

「え、だってあれは写生だから……」

「俺には、あんなに冷たい白には見えないけどな」

なんとなく、思い当たるふしがあったようで、悠一は反論もせず逆に考えこんでしまったようだ。

「素人の好き嫌いでいっていいなら、俺は、湊の水彩画のほうが好きだけどな」

部活の課題で、つい最近まで描いていた水彩画のほうが、もっと自由に絵の具を使っていたように思う。色彩が鮮やかで、しかも透明な絵を悠一は描く。

「ほんと？」

彰のことばが嬉しかったのか、悠一の顔がほころんでいた。

「なんだか、嬉しいな」

その笑顔がまぶしくて、彰はどきりとする。

陽がおちてしまっていて、良かった、と思う。

いつもなら駅の改札をぬけてしまうと右と左にわかれるが、その

日はなぜか、悠一が帰りたくなさそうな素振りをしていた。

「なんか、飲んでいかない？」

もちろん、彰に異存があるはずがなかった。

いったん抜けた改札を、駅員にかけあって出してもらうと、駅前のファースト・フードにはいつていた。

この時刻、部活帰りの連中で席は埋まっている。

彰も以前はよく、部の仲間や宇田川とここに陣取って時間をすごしていたものだ。

やっと、二階に席をみつけて割り込んでいた。

周囲には、顔見知りが大勢いて、賑やかを通り越してうるさいくらいだった。

ふと見ると、宇田川が大きく眼を見開いてこっちを見ていた。

「ねえ、その砂糖もらってもいいかな」

「え、ああ……」

なぜ、あんな瞳をして俺を見るんだろう、と思いつながら返事をす。彰がちいさく手をあげると、宇田川はそつと視線を逸らしていた。

（まあ、いいか）

悠一のほうに視線をもどすと、じぶんで砂糖を2本買っておきながら、彰の分を追加しているところだった。

思わず、ぷ、と吹き出していた。

「甘党なのか」

「苦くて……」

そう言われて、後悔した。注文したのは、彰だ。

「聞いてやれば、よかったな」

「つぎから、紅茶かカフェオレにしてくれる？」

次があるのか、と思わずときめいた。

「いいよ」

やさしく微笑していた。

悠一は、その笑顔が好きだと思う。

ぱつと見ると彰の面立ちは整っているがゆえに鋭くて、怖いようにも見えるのに、彼がその真っ黒な瞳を細めて笑うと、その印象は消えてしまう。

それぐらい、やさしい微笑をもっている。

そうやって見られていると、なぜか、安心した。

「進学コースって、みんなだいたい塾通いだから、こういう店ってくることなくして」

「美術部の連中とも？」

「うん」

「そういえば、いつも最後のひとりだったな」

悠一は頬杖をついて、窓の外を見た。

「僕……本当はさ」

そのとき、ひときわ大きな笑い声が沸き起こって、悠一の声はかき消された。

びっくりして悠一は背後をふりむき、顔をもどして、ぎょっとする。彰のこめかみ辺りに、鋭い苛立ちが浮かんでいた。

「出よう」

言うなり、鞆とスチロールのカップを持って、立ち上がっていた。

慌てて、悠一もあとに続く。

わけがわからなかった。

自分が怒らせたとは思わないが、行動が素早すぎてついていけない。

落ち着いたのは、ちいさな児童公園のブランコだった。

「あー、もう！ べつの店にすればよかった！」

ブランコの鎖を握った手に、ゴンゴン額を打ちつけている。

「どうしたか、聞いてもいい？」

「あの店、うるさすぎて……」

「僕はべつに、構わなかったけど」

確かにうるさいことは、うるさかった。彰のひくくて通りのいい声でさえ、聞きとりにくかった。

「けど、悠一にとっては友人との寄り道じたいが珍しくて、心を躍らせていたのだ。」

「見ていると、彰はようやく落ち着いたように長い時間いきをついていた。」

「そうじゃないんだ。せつかく何か話そうとしてただろう？ それ」
「が、聞こえなくて……いきなりキレちゃった。ごめん」

「べつに、たいしたことじゃないよ」

「悠一は、思わず笑っていた。」

「俺には、たいしたことなんだよ」

「言われて……なぜか、悠一はいつしゅん息が止まったようになっていた。」

「きれ長の鋭い目で正面から見られて、思わず視線をそらせていた。」

「ほ、ほんとに、たいしたことじゃないんだって！ ただ、進学のこと」
「で親と揉めて、家に帰りたくないってだけ」

「キイ、キイと音をさせてブランコをこぎだした。」

「それは、たいしたことだろう？ どこ行くつもりなんだ」

「悠一は、芸術大学の名前をぼつりと自信なさそうに言っていた。」

「でも、両親は反対なんだ……中学のときから、行っているいい大学は決まっていた」

「そりゃまた、すげえ、と彰のつぶやきが聞こえる。」

「萩生とこは、そういうのなの？」

「ないよ。まあ、チンピラとかやくざでなきゃいい、ってところなんだらう」

「その答えに、悠一が思わず笑う。」

「美術顧問には相談したのか」

「うん……実技があるから、受験するなら早めに用意したほうがいいって」

「ブランコを止めて、やっと持ち出したコーヒーに口をつける。」

「それはもう、冷えてしまっていた。」

「結局お金をだすのは親だし、将来そんなもので食べていけるのか、」

って言われたら……僕には反論できない」

さすがに、彰からも言葉はかえってこなかった。

だけど、悠一にはたとえ親のいう大学に行ったところで、やはり将来など見えない。

ほんの数先ならわかる気がしても、それよりも遠い未来など、想像もできない。

この、いま現在でさえ道を見失ってしまっているのに、なぜわかるだろう。

「将来のこととか、考えたことある？」

「ないよ」

彰の答えは、あっさりしたものだった。

「ないけど……なっていないもののリストはあるな」

「それって、どんなリスト？」

「犯罪者と高級官僚、あとサラリーマンもないかもしれない」

そう言った瞬間、ちらりと、父親の顔が浮かんでいた。

そう、彰はそっちの結論を出さなければならなかった。

「諦めるなよ、湊」

「……うん」

マンションに戻ると、母はまだ戻っていなかった。

彼女は税理士事務所働いている。

受け持ちに10月決算の会社があると言っていたから残業をしているのだろうが、最近の彼女は働きすぎだ。

理由は、彰にもわかる。

もどってきてても、暗くて冷え切った部屋しか待っていない事実が物語っている。

時計をみると、9時前だった。

鞆をソファに投げると、彰は由紀子に電話をかけていた。

「母さん？ 俺だけ」

ごめん、ごめん、と小声で謝っていた。

「そつちまだ仕事かかりそうなら、ビジネス泊ってくれば……いや、ほんと俺は大丈夫だから。それよりさ、明日乗換する駅で朝メシ一緒にしようよ」

電話を切つてから、こんな事なら道場にでも寄ればよかった、と思う。

もとから、こんな家族だった。

親子三人で暮らしていたときでも、両親とも仕事があつて、逆に彰が家事をやっていた。身の回りのことは、この家族は全員ができる。由紀子はもちろん、父親でさえたまに台所に立っていた。

父親のつくる、ベトナムで覚えてきた香草を大量につかつた米のソバが懐かしい。

なにをする気にもならず、彰はそのままソファに倒れこんだ。

「くそ……グレても知らねえから」

あげた腕で目を覆つて、つぶやく。

だが、彰にそれはできない。

そうするためには、自立しすぎていたし、両親に愛されすぎていた。

彰は、両親から口うるさく言われたことがない。

成績についても助言はされても、命令されたことはない。高校もじぶんで決めだし、たぶん大学もそうだろう。

将来、彰がどんな道をいこうとも、どちらも受け入れる。

だから、来週から始まる進路相談も、彰は保護者不在だ。

それでいいと思つている。

だが、湊悠一は。

別れ際、悠一はほんの少し、泣き顔になっていた。

それに関しては、彰もなにもしてやれない。

あんな脅し文句を吐かれては、悠一はたまつたものではないだろう。

食べようが、食べなかつても……順番でいけば、先に死ぬのは親

のほうだ。どちらにしろ、親がそこまで責任を持てるわけがない。父親にこの話をしたら、どう言うだろう、と彰は思う。こんなときこそ、いてほしいのに、いまはもう電話をするのもためらわれる。

10日前の日経新聞に、父親の名前と顔写真が出ていた。

社長就任挨拶の文言が、社のぶちぬき広告に掲載されていた。

彰はそれを、直接電話で聞いてはいたが……実際に目にして初めて、遠くなった、と実感した。

それは、母親の由紀子もそうだったようだ。

しばらく紙面を凝視したまま、青白い顔で動かなかった。

社長就任も実際は一時的なことだ。

いずれ、すぐに空席になっている北条グループの総帥の地位に就く。

経済界でも、最も若いトップの誕生になる。

そうなれば……さらに遠くなってしまいうだろう。

(ああ……嫌だ)

父親でさえ抜け出せないしがらみのなかに、もし、将来じぶんが巻き込まれるとしても、逃げ出すに決まっている。

彰の気持ちはもう、何日もまえから決まっていた。

あとはただ、それを告げるだけだ。

が、彰はずっと父親に会いに行くのをためらっていた。

？

父親に会うのをためらっていた彰の背中を押したのは、ほかの誰でもない、湊悠一だった。

学力テスト後の最後の進路相談週間に、それは起こっていた。

「萩生、おまえ親は」

「来ません。仕事あるから」

担任は、どうしたものかと思案したが、スケジュールの都合上そのまま行くことにした。

どちらにしろ、この生徒の場合よほどつぴな進路を言い出さな
いかぎり、心配するほど悪い成績ではなかった。

「三年になったら、こうはいかないからな」

釘をさされても、彰は黙って笑っていた。

彰の進路は、外国語大学になっていた。第一希望から第三希望まで、ぜんぶ。

「俺には、そっちの才能があるでしょう？」

そう言われてしまえば、担任にも言うべき言葉がない。

ほかの教科は平均を上回る程度だが、語学系と音楽に関する成績は、学年トップだ。特に、ヒアリングがずば抜けて良かった。

理由はだれにもわからないが、脳の構造がそうなっているらしい。

彰は、映画も字幕をほとんど見なかった。

「第一志望の」大は、数学をもつすこしやれば、いいだろうが」

「じゃあ、決まり」

あんまりにもあっさりしていて、拍子ぬけしたような担任の表情だった。

「皆、おまえぐらいだと苦労がないんだが……ところで、あの噂は本当か？」

「噂って？」

「英語で喧嘩ができるそうじゃないか」

「できますよ」

去年、留学生が数人やってきた。

彼らはほとんど進学コースのクラスに編入されたが、一年のときに、たまたま学生食堂でかちあって、あまりのマナーの悪さに彰が文句を言った。

それが、大変な口論に発展した。

ものすごい早口の英語の啖呵に、ついに彼らのほうが謝った。

地味で目立たない萩生彰の、たったひとつ目立った行為だ。

宇田川しか知らないが、彼らとはその後も文通をしていた。

面談が終わって、教室をでたところで廊下の先から男にひきずられるようにして階段を降りていく悠一が見えた。その後ろから、教師がふたり慌てて追っていく。

男の怒声に混じって、悠一の悲鳴のような声が聞こえた。

思わず、彰はそのあとを追っていた。

たどり着いた先は、美術部の部室だった。

なにかをひっくり返すような派手な音と、怒声が響いてくる。

なにか、起こっているのか。

が、のぞいたところで、彰にもどうしようもない事態だとわかる。ためらっていると、中から悠一が飛び出してきた。

「おい！」

すり抜けて走っていきこうとするのを捉まえて、振り向かせた顔は涙で汚れていた。

こんなに傷ついた表情を見たのは、初めてだった。

その痛みに、彰はじぶんが貫かれたように感じていた。

無言で悠一の手をとると、そのまま走って、道場の部室に連れていく。

誰もいないのを確認すると、やっと声をかける。

「大丈夫か？ どうした？」

父さんが……、と震える声で言ったところで、とうとう悠一は声をあげて泣きだした。

部室のベンチに座らせて、自然と肩を抱いていた。

悠一の頭に手をそえて、じぶんの肩で泣かせてやった。泣きながら、きれぎれに言う話は、ひどいものだった。

悠一は、進路については家の中ではどうにもならないと考えて、美術顧問につきそってもらって、今日やっと父親と対決した。

父親の怒りは、激しかった。

話にも何にもならず、とうとう美術部の部室に乗り込んで、悠一の作品を破壊した。

「なんてこった……」

暗澹たる気分になった。

コツコツと、悠一がこれまで描きためてきた作品が、無残にもガラクタと化したのだ。これほどまでに傷つける行為というのも、彰は初めてだった。

「泣くな……」

それしか言葉がない。

たかが一介の高校生には、なにをしてやるにも力が足りない。

あまりに無力で、こうやって肩を抱くよりほかにしらなかつた。

悠一を送りだしたあと、彰は美術部の部室をのぞいた。

なかでは、顧問がやたらとため息をつきながら、バラバラにされたキャンバスを拾い集めていた。

その情景に、彰のほうで泣きたくなつた。

「なにか、用か」

顧問がやっと気づいて、怪訝そうに言っていた。

「湊の絵は、ぜんぶ駄目になりましたか？」

その言葉に、顧問の顔がいつしゅんにして怒りで赤くなっていた。

「この通りだよ！ なにも、ここまですることはなかるう！ 駄作だらうがなんだろうが、彼がこれまで描いてきたモノだぞ！」

その通りだと思う。

父親だというだけで、ここまでやってもいいものか。

「いや、ああ、すまん……関係がない者に、なにも怒鳴ることはなかったな」

いいんです、と言って見まわした彰の視線が、とまる。

白いキャンバスに挟まれるようにして、青い表紙のスケッチブックが立てられていた。

ものも言わずに近づくと、それを引き抜く。

「先生……」

ふりむいて、彰はあかるい微笑を見せた。

「ああ……それだけは、無事だったか」

顧問も、すこしだけ顔色をあかるくしていた。

悠一がずっと水彩画を描きためてきたスケッチブックだ。

これさえ、あればいい。

「これ、借りていきます」

彰は顧問の返事をまたずに、それを脇にはさむと部室をあとにした。

翌日、見上げるだけで溜息がでそうな、高層ビルの前で、彰はうんざりした顔をする。

北条貴之がいる、本社ビル。

大理石とガラスでできた一階のロビーには、ガードマンと受付嬢が陣取っていた。

退社時間にも紛れ込んで、と安易な考えはとっくに吹き飛んでいた。

それまで待とうと思えば、あと二時間以上はここでウロウロと不審者をやるより他にない。

とうとう覚悟をきめて、彰はエントランスの自動ドアをくぐる。

案の定、受付でとめられた。

愛想のいい笑顔をしているが、かなり胡散臭そうに思われているのがわかった。なにしろ、こっちは学生服だ。

「どなたをお呼びいたしましょうか？」

「あの……」

言いかけて、考えこんでしまった。

父親を、と言ってはたして通じるかどうか。

それよりも、社長に息子がいるとバラしていいのかがどうか、わからない。

以前は、簡単だった。

会社に電話をすれば、出てくれた誰かが「部長、息子さん」と朗らかに取り次いでくれたものだ。

「あの、社長に……萩生彰がきたと、伝えてもらえますか？」

は？と受付嬢は笑顔のまま、聞き返す。

「だから、社長に」

三度も訊きなおされて、むっとした。

「あのね……」

ちいさな子供にでも言い聞かすように、ピンクのルージュをひいた唇が動く。

「社長と会いたいのだったら、あらかじめアポ……予約をとっていただかないと、お会いできないのよ」

馬鹿野郎、と彰はこころのなかで悪態をつく。

電話は、何度もしたのだ。

社長室直通電話にも、携帯にも。

だが、残した留守番メッセージにも折り返しの連絡がないまま、ここまで来てしまった。

(来るんじゃ、なかった……)

じぶんの父親が、これほどまでに遠い存在になったことを思い知らされるために、来たようなものだ。

溜息をついて、彰は受付をはなれた。

その、エントランスを抜けていこうとする学生服のうしろ姿を、

エレベーターから降りてきた一人の男が認めて、駆けるように受付にむかっていた。

彼は、北条貴之の新生秘書室の精鋭だ。

まだ四十前で、抜擢された。

「いまの学生、名前を言っただか！」

いきなり怒鳴りつけるように言われて、おどおどしながら返ってきた言葉に、男はキレた。

「馬鹿！！」

言葉を投げつけて、慌てて走りだしていた。

ネクタイが、風でうしろになびいていく。

ひとつみに紛れてしまいそうな後姿にむかって、大声をあげていた。

「彰くん！！」

何度目かで、やっと足をとめて振り向いていた。

「遠藤さん……」

「よ、よかった……」

この歳で、これだけ走るのはきつい。

膝に両手をつけて、ぜいぜいと背中を波立たせる。

「大丈夫ですか？」

「いや、ぶっ倒れそうだ」

やっと、呼吸がおちついて身体を起こすと、ネクタイを弛めていた。

「それより、君……社長に会いにきたんだろ？」

「アポとれ、っていわれたんで……出直します」

ほろ苦い笑顔に、遠藤は胸をつかれていた。

遠藤は、秘書室では中堅どころになるが、社長のプライベートな事情については第一秘書の役割をもっている。

帰れない社長の代りに、何度かマンションへも訪れて、顔見知りだ。

「馬鹿なことを……僕が連れて行ってやる」

彼は、内心かなり怒っていた。

たったひとりの息子が会いにきたのに、思うように会えないなんて理不尽なことがあっていいわけがない。

途中で斃れて半身不随のままでもまだ、嫁も孫もいらなまいと言いつ張る会長のすがたには、もはや怨念しか感じない遠藤だった。

「きみに会えば、きっと元気がでる」

そう言われて、彰は思わず上層階直通のエレベーターから降りたくなった。

元気がでるところか……父親を落胆させるだけかもしれないのだ。通されたのは、見晴らしのいい社長室だった。

「座って、待っていてくれ」

そういわれたが、座る気にはなれなかった。

はめ込みのガラス窓からは、周辺のビル群が一望できる。

こんな部屋に、学生服でいるのはあまりに似合わない気がした。

北条は、会議中だった。

グループのトップだった父親が途中で斃れるまえから、業績は悪化していた。

莫大な資産をかかえるだけに、一度坂をくだりはじめると加速がついて急角度で下降し、そこへもってきての入院と社長交代劇だ。

悪いことに、北条はながく縁を切ってきたために業界おける知名度がひくく、対外的にはもちろん、内部にも信用がない。それは、これから彼がつくっていくかなければならないものだ。

だが、同時に思い切った外科手術をほどこさないかぎり、海外も含めて末端までいれると数万人にもものぼる従業員を路頭に迷わせることになる。

延々とつづく会議に、彼は爆発しそうだった。

いってみれば、無能、無策の連中がこれまで重役として生きながらえて、こんにちの事態をまねいた。なのに、なんの対策もない。

(対案でももって会議にすればいいものを)

答えももたずにやる会議など、ただの時間の浪費だ、と怒鳴りつけてやりたかった。

そこへ、遠藤がはいってきた。

そつと背後に立つと、腰をかがめてメモを差し出す。

その文面を見た瞬間、北条は椅子をけて立ち上がり、三十分の休憩を申し渡した。

バタバタと、まるで走るように出ていく社長のすがたに、彼よりはるかに年上の重役たちは顔色をかえていた。よほど、不吉な想像をしたのだろう。

「……彰か」

ドアあけて、こちらを振り向いた息子のすがたに、北条はそれだけでも癒されるような気がした。

どれぐらい会っていなかっただろう。

一日たりとも、彼は妻も息子も、忘れたことがなかった。

「電話ぐらい、出るよな」

苦笑まじりに言われて、むしろほっとする。

遠藤は、お茶も出ていないテーブルを見て、そつと席をはずした。

「悪かった……元氣そうだな」

「うん、まあね」

会わないあいだに、急におとなびた、と北条は思う。

北条の身に起こったことの影響は、間違はなく彼のたいせつな家族にも及んでいる。

「今日は、どうした」

「進路が決まったから……言っとかなきゃと思って」

「もう？ 早くないか」

驚いて言つと、彰が笑ってやつとソファに腰をおろす。

「どこに決めた」

「外大……俺みたいな語学バカにはちょうどいいだろ？」
なるほど、とうなずく。

英才教育をほどこしたつもりは北条にはなかったが、幼いころから英語で話しかけたり、歌ってやったりしていた。彰の耳は、すなおにそれを拾って成長した。小学校の低学年でビートルズをそらで歌えた。

「わかった、それならどこへ行ってもつぶしが効くな」

そこへ、遠藤がコーヒートをトレイに載せてはいつてくる。

それを受けとって、彰は無意味にスプーンでかきまぜる。

「どうした、飲まないのか」

じぶんは口をつけながら怪訝そうに彰をみていた北条は、顔をあげた息子の眼に、思わず身構える。

なにかを決意したときの表情は、由紀子にそっくりだ。

「もうひとつ、決めたんだ……俺は、北条の籍にははいらない」

沈黙が、おちた。

遠藤は、背中でその言葉をきいて、そつと部屋をでた。

「そうか……決めたのか」

ずいぶん黙ってから、北条はやっと、それだけ言っていた。

カップをテーブルに置いて、ふう、と息をはく。

「そうなるだろうとは、思っていたがな……」

いざ、直接聞いてみれば、思った以上にこたえた。

かといって、もろ手をあげて妻と息子を歓迎できるような環境をつくるのが出来ない状態では、彼にもどうしようもなかった。彼の父親は、半身不随になった身体でさらに暴君と化して君臨している。息子でなければ、見捨ててしまいたいぐらいだ。

「私に、怒っているか？」

彰の返事は、簡単だった。

「そりゃ、ちよつとは怒ってるよ」

笑ってつけくわえる。

「受付では止められるし、遠藤さんが追っかけてこなきゃ会えなかったんだから。でも、俺がほんとうに怒ってるのは、父さんが母さんをどうするつもりなのか、ってこと」

「私は、由紀子を愛しているぞ」

「わかつてるけど……たまには、デートぐらいしろよ。忙しいのはわかるけど、惚れたおんなを中途半端にしとくなんて、らしくないよ」

彰のことばには頷くほかないが、北条はこんな未恐ろしい息子があつていいものかと思った。母親を「惚れたおんな」と形容するとは思わなかった。

「母さんは、絶対にながあつても俺みたいには、会いにこないんだから」

「わかった。それは私がわるかった」

社長といつても、息子にやりこめられては世話はない。

北条はつい、それが嬉しくて短く笑っていた。

「俺は、なにかあれば会いにくるよ」

「それなら、急ぎのときは遠藤に連絡しろ。彼がスケジュールを調整してくれる」

「うん……それでさ、さっそく頼みごとがあるんだけどな」

彰は、悠一のスケッチブックを手渡した。

「これは？」

「うん……俺の、だいじな奴の」

息子の表情のやさしさに、北条は「おや」と思う。

どうやら、恋をしているらしい、と踏んだ。

そして、彰から事のあらましを説明されて、北条はまるでじぶんの父親の話をされているように錯覚する。そういうタイプの男は、おのれを神とでも思っているのだ。

「どうして欲しい」

「このさき、モノになるかなんて誰にもわからないけど……チャンスはあつてもいいだろ？」

「何とかしよう。これは、しばらく預かるが、いいか？」

そこで初めて、北条は息子のくつたくのない笑顔をみていた。

それほどまでに大事なら、父親としては叶えてやるしかないと思

う。

スケッチブックをぱらぱらとめくって、綺麗でまとまっているだけの絵ではない、と思いながら、表紙の裏のサインに目をとめた。

「彰……」

「なに？」

「たしか、大事な奴だと言ったな、おまえ。これは、男の名前だろう」

「そうだよ。それも、俺が籍にはいらぬ理由」

さすがの北条も、どう反応すればいいか困っていた。

「いや、しかし……これまでは、相手はいつも女の子じゃなかったか」

「たぶん、おんなも大丈夫」

「そんな、節操なしな……」

「わからないんだよ、まだ。自分がどつちかなんて」

父親としての溜息をついていた。息子をあいてにしているより、会議で馬鹿重役を見ているほうが気が楽だ、と思った。

？

昇降口で靴をはきかえていると、聞き覚えのある声がした。すぐに反応できなかつたのも、無理はない。彼をなまえて呼ぶのは両親くらいだったからだ。まさか、校内で下のなまえを連呼されるとは思っていなかつた。

「あきら……彰！ 萩生つてば！！」
やっと気づいて振り向いたところへ、悠一がタツクルのように飛びついてきた。

ふいうちをくらって、息がつまった。

朝の昇降口の混雑のなかだった。

ずっと追いかけてきたらしく、悠一の息はすっかりあがってしまっている。

「ずっと呼んでたのに……ぜんぜん、気づかないんだからさ」
ひさしぶりに見る、悠一のアかるい表情だった。

「なにか、いいことがあったらしいな」

スニーカーをロッカーに入れながら、彰は言った。

その横を、宇田川の長身が無言ですりぬけていく。

「あつた！ 条件付きだけど、芸大受験していいって！ ゆうべ、急に言い出したんだよ！」

それを聞いて、彰はとんでもなくやさしい微笑を見せていた。

「よかつたな」

「うん……彰、ありがとう」

悠一のことばに、彰の心臓がとんと鳴る。

「ちょっと、そこで待ってて、僕も靴はきかえてくる！」

動こうにも、動けなかつた。

ま正面から聞いた、じぶんの名前……悠一の口からでる「彰」という響きのもたらず甘さに、酔いしれそうだった。

（まいったな……）

「いったい、いつから？」

悠一はどうして、いきなり名前を呼びすてにしようと決めたんだらう。

悠一はすぐに戻ってきた。

「彰……どうかした？」

「……いや」

じぶんの表情に自信がもてずに、彰はちょっと横をむく。

「あのさ……顧問の先生に、聞いたんだ。僕のスケッチブック、彰がもっていった、って。保管しておいてくれるつもりなのかな、って思ってたんだけど、それ、ゆうべ父さんの手から返ってきたよ」
それを聞いて、彰は父親が年内に決着をつけてくれたことを、知った。

「芸大の教授からの手紙がついててさ、それで父さんも折れてくれたみたい。そうしてくれたのは、彰だよな？」

彰は、肯定とも否定ともつかない返事をしていた。

そういう手があったとは、気づかなかった。

もっとも、父親の力があればこそだったのだから。

「それより湊、なんで俺を名前で呼ぶんだ？」

本当は、理由などどうでもいいのだが、聞いてみたかった。

「だって、ほかには誰も呼ばせてないだろ？ それとも、嫌かな。

なんか、僕しか呼ばないような呼び方がほしかったんだけど……」

「いや……いいよ」

彰は、悠一のためになんでも差し出しそうになる自分が、いつしゅん怖かった。

じぶんが剥き出しになって、どんな些細なことでも傷つきそうだった。

これまではまだ、よかった。

彰はじぶんの名前を差し出すことで、悠一にたいしては抗えないだらう自分を知った。

いつのまにか、階段を昇りきっていた。

「じゃあ、またあとで！」

元気いっぱいになった悠一とは反対に、彰はこれまで以上に本気になった自分を見つけて、怯えてしまった。

(いままでののは、何だったんだ……)

それまでの恋は、ただのままごとか気の迷いだとしか思えないほどだ。

とうとう彰は、始業チャイムが鳴っても動けないまま、教師に見つけられるまで階段の踊り場で壁にもたれて立っていた。

悠一は、彰が好きだった。

一緒にいると楽しいし、なにより安心感がある。

まるで、友人というより兄がひとり出来たような気分で、休み時間にはクラスメイトではなく彰に会いに行く。

何でもないようなことでも、彰は悠一のことを楽しそうに聞いてくれるからだ。

家のなかでの悠一は、どこまでも従順なおとなしい少年だった。

姉がひとりいる四人家族だが、父親はもちろん、悠一は三つちがいでW大に通う姉にさえ頭があがらない。

性格がきつくて上昇志向、将来は法律家志望の彼女にとって、芸術家になりたいと言いつ出した弟はもはや異星人と同列で、最近は何となく喋ってもくれない。

もともと、父親寄りの姉とおとなしい悠一とでは、姉弟でも性格が違いすぎて、子供のころから合わない相手だった。

たかが、絵ぐらいで、なによ。ベソベソしちゃってさ。あんた本当に男なの？

と言われたことは、いまも悠一のなかに傷として残っている。

それでも……彰が救ってくれた。

父親の手から戻ってきたスケッチブックには、芸大教授の手紙のほかに、イラストレーターとして有名なタヒチ在住の画家の手紙も

はいつていた。

辞書をひきひき、その手紙を読んで……悠一は、夢ふくらませた。しぶしぶながら、父親も譲歩した。

だから、悠一にとって彰はもう「特別」だった。

冬休みには、ふたりで美術展へも行った。

チケットを用意したのは、彰だった。悠一が、いつだったか言った「この画家の絵が好き」という言葉を覚えていてくれたのだ。

彰の家にも、遊びに行った。

悠一自身は、子供のころから友人を家によぶ、ということも呼ばれることもなかったから、すごく新鮮だった。

「おじゃましま〜す……」

どきどきしながら言つと、隣で彰がわらっていた。

「誰もいないよ。仕事いつてるから」

正直におどろいた。

悠一のところはずっと専業主婦だったから、電気の消えた家自体めずらしい。

「湊は、紅茶でいいんだろ？」

着替えてでてきた彰は、黒いタートルネックのセーターに、ブルージーンズという格好で、学生服のときより数倍、大人っぽく見えた。

わざわざ、茶葉をティーポットに入れて紅茶をたててくれた。

「上手だねえ……」

「おまえ、これぐらい普通だれでもするだろ」

しかし、悠一はやったことがなかった。

なにかかもを、両親に管理されて生きてきた、とんでもない箱入り息子とは悠一の事だ。

子供の時からそうだった。

つきあっていい友達まで、管理されていた。

その悠一が両親に反抗したのは、芸大に行きたい、と言ったときだけだ。

それほど、絵を描くのが好きだった。

「うちで飯くってく？ それなら何かつくるけど」

DVDのコレクションを物色しながら、彰がいう。隣のぞきこんでいた悠一は、驚きを通り越した目をした。

「彰って……料理もできるんだ」

その発言に、彰のほづがうるたえたように、ちょっと身体をひいていた。

さっさと立ち上がって、DVDをセットする。

「湊、聞いていいか？ おまえさ、調理実習なにやってたんだ？」

「……見物」

「うわっ、それは最低……じゃ、包丁握ったこともないのか？」

なにが最低かもわからずに、悠一はすなおに「うん」と言う。

リモコン操作の手をとめて、彰がふりかえるとやさしく笑っていた。

「……困ったやつ」

なんだか、その言い方があまりにやさしくて、悠一はまた、彰のことが好きだと思った。

道着姿の萩生彰が、好きだ。

その、キレのいい流れるような身ごなしが、好きだ。

正面からでは鋭くきついのに、おどろくほどにもノーブルで脆い横顔が、好きだ。

ひくくて、響きのいい声も好きだ。

形のいい、薄くも厚くもないくちびるが、好きだ。

宇田川保は、中学のときから彰が好きだった。

しかし、ずっと自分の気持ちは隠してきた。

告白をして失うことよりも、彰のいちばんの友人の位置にいる事を選んだ。

彰がおなじクラスの女子とつきあっていたときも、宇田川はその選択を正しいと思った。自分をなくさめることができた。

しかし、今はちがう。

いつだったか、彰がAクラスの委員長をみていた瞳で、わかった。あんな眼差しで、友人をみたことはない。

(くそ……あんな、あんな瞳で男を見るなんて)

これまでの自分が、いきなり馬鹿ばかりかしく思っていた。

三学期にはいると悠一の部活動の内容は、父親の了解が得られたということ、受験用が変わっていた。悠一の出された条件というのは、国立の芸大に入学することだった。

放課後の部活に、顧問が後輩の美大生を家庭教師に呼んでくれた。彰もそれにつきあって、部活が終わった道場でひとり、合気の型を練習することにした。

彰は、これが好きだ。

姿勢、型の完成度、呼吸や足さばきの一つひとつに神経を集中させていると、雑念が消えていく。

家でも、ときどきこれをやる。

頭のなかで、完成された型のイメージを追いかけてながらひとつずつ、丁寧に決めていく。

彰の型稽古のうつくしさは、顧問でさえ溜息をつくほどだ。

一連の動作を終えて、最後に正座でしめくくる。

静かな動きのようにも見えるが、これは真剣にやれば大量に汗をかき稽古だった。

その日も、顧問から鍵をもらってずっと、型稽古をやっていた。そうして、ふう、と息をはいて正座から立ち上がったところで、道場の入り口にスポーツバッグを肩にひっかけた宇田川を見つけていた。

宇田川の両手が数度、音を鳴らして道場に響いていた。

「いつから、そこにいたんだ」

「だいぶ前から……見惚れてた」

本当だった。宇田川は、切なさに泣くような想いで彰を見ていた。上がってこいよ、と言われてスニーカーを脱いで畳を踏んでくる。「俺でも、本当に投げられるのか？」

言っと、彰が笑っていた。

宇田川はまた背がのびて、いまはもう185を超えていた。

「合気は、投げるんじゃない……うまくやれば、相手が勝手に回ってくれる」

「本当か？ ちょっと、やってみてくれよ」

あまり、気のりがしない表情で宇田川を見る。

「一回だけ、な？」

「抵抗するなよ……おまえ、受け身ができねえんだから。怪我させなきゃいいけどな」

スポーツバッグを置いて、どうすりゃいい、と訊く。

「いいから、かかってこいよ」

余裕しゃくしゃくで言われて、宇田川はむっとして、タックルをかけるようにいきなり突進していった。

彰から見れば、宇田川は隙だらけだ。

どこを打つても、押しても、引いても、勝手にまわってくれそうだった。

相手ののびてきた手をじぶんの手首の外側で受け流して、ふわり、と宇田川の身体を回転させていた。

バアーン、と道場の畳が鳴っていた。

宇田川は、ぼかんとした表情で天井を見上げていた。

なにが起こったのか、皆目わからなかった。

「……まいったな。本当に勝手にまわっちゃった」

すぐそばに、彰が片膝をついて微笑していた。

「そら」

差し出された手をつかんで……宇田川は力をこめて引くと、身体

をいれかえていた。

彰が、宇田川の下になっていた。

「プロレスでもするのかわ？」

「……いや」

彰の両手首を、それぞれの手でつかんで、頭のうえで押さえつけてのぞきこむ。

この体重差では、さすがに彰も跳ね返すのは難しい。両脚に、宇田川の膝がのっけているとなれば、きつい。

どうやら、全体重で押さえこまれているのがわかった。

「宇田川……？」

「なぜだ？」

かすれた声が、降ってきた。

「なんで、あんな奴に名前を呼ばせてるんだ。俺でさえ、呼ばせてもらったことがないのに……」

照明の逆光のなか、眼をほそめて、いぶかしげに見上げた宇田川の顔は、いまにも泣きだしそうに見えた。

「俺が、さきにおまえを好きだったのに……それでも、おまえは普通の男だろうと思っていたから、ずっと黙って耐えていたのにいまごろになつて、なんで……」

彰のきれ長の眼が、驚きにおおきく見開かれた。

「……しらなかった」

「そうだろうとも……俺がどれだけ必死に隠してきたと、思っただけが」

掴まれた腕に、すごい力がかかって、痛みに彰は顔をしかめた。

「あの、おきれいなツラがお前のまわりをウロチョロするたびに、俺がただ殴りとはしたかったか、わかるか？ まるで自分のものみたいに、平気で呼び捨てにしているのを見て、殺してやりたいと思っただくらいだぞ」

「こわいこと、言うなよ」

「怖い？ たしかに、俺はじぶんが怖いよ」

言葉とはづらはらに、彰の頬につめたい滴が、一滴おちていた。

「おまえを……どうにかしてやりたいよ。ずっと、俺がおまえの隣にいたんだぞ？ それをいきなり追い出されて、あんな奴がふんぞりかえって！ こんなに好きでなければ、本当に、どうにかしてやりたい！！」

彰は、どうすることも出来ずに、ただ、目を閉じて力を抜いていた。

抵抗する気には、なれない。

ここにいるのは、未来のじぶんかもしれない、と思うからだ。

「誰にも……渡したくない」

顔にかかる、熱い息。

のしかかる体重を受け止めて、彰は迷いながら微かにくちびるを開いていた。

不器用なキスだった。

ぎこちなく押し入ってくる舌に、そつと、自分から絡めて応える。いつのまにか解放されていた両手で、やさしく宇田川の頭を包んでいた。

しかし、さすがに道着をはだけられて、きつく乳首を吸われたところで、押しとどめていた。

「たのむよ……」

宇田川の声は、せつぱつまっていた。そういうあいだも、あちこちにキスを降らせていた。それへ反応してしまうのは、彰も理性ではどうにもならない。

キスが、胸からなめらかな腹部へと、降りてくる。

彰は、天井の照明を見上げながら、きつく眉間にしわをよせた。

「宇田川、おまえ、俺のからだ欲しいのか？」

動きが、とまる。

「身体だけでいいなら、ここで好きにしろよ。でも、心はやれない」
きつぱりと、言っていた。

宇田川は動けなくなっていた。

彰の肩に顔をうずめたまま、ただ、がむしゃらに抱きしめる。

「おまえ、そんな……きつい事、よく言うな」

ようやく、くぐもった声を出していた。

「全部ほしいに、決まってるじゃねえかよ……身体だけでいいなら、よそに行く」

「だよな」

熱が、冷めていくのを、お互いに感じていた。

「くそ……なんで、こんな奴に惚れちまったんだろう。平気で身体ならやる、なんて言うやつ、最低だ」

「……ごめん」

「じゃあ、いただきます、って言えねえ俺も最低だよ」

それはないだろう、と彰がわらいを含んだ声でつぶやいた。

むっくりと、宇田川はからだを起していた。

腕をつかんで、彰を起してやる。

気がついたら、ふたり並んで胡坐をかいていた。

「だめもどだったんだけどな……」

隣をみると、彰が道着をなおしている。

「それにしたって、おまえ、本当にひどいぞ！俺じゃなきゃ、マジでやられてたかもしれねえのに」

思い出したら、頭にきたらしかった。

彰は、ただ笑っている。

「本気だったんだよ、宇田川。でも、抱かれたら……もう友達ではいられないって、そう思うと俺も怖かった」

「こんなことやった俺でもまだ、友達か」

「……ああ」

どういう基準だ、と文句をいって宇田川は立ち上がる。

スポーツバッグを拾いあげて、彰を見下ろした。

「俺な……親父の転勤で、来年春には引っ越すんだ。残りたかったけど、うちの家計じゃ無理いえねえしな」

彰の表情が、いきなり寂しそうになっていた。

「そんな顔、すんなよ。大学はこっちに戻ってくるから」

「するに、決まってるだろう！」

「それ、俺にはうれしいよ」

「じゃあな、と歩きだしかけて……また戻ってくる。」

「もう一回だけな」

思いつき身体を折って、キスを奪っていた。

それを見送って、彰はためいきをつきながら、畳の上に身体をのばしていた。

嫌ではなかった。

男に拒否反応があるなら、宇田川の手がふれた時点でこっちの手が出たろう。

だが、嫌ではなかった……。

今日だけはもう、悠一が待ちくたびれて先に帰っていてほしい、と彰は切実に思っていた。

？

2月14日に、彰はチョコを三つ貰った。

ひとつは、母の由紀子から。

それは、どう見ても質より量のキャンディー詰め合わせで、甘いものが苦手な彰では、食べきるのに半年はかかりそうだった。

もうひとつは、宇田川から。

昼休みに、ちよつと来い、と言われてついていったら、ポケットから出てきたのは、光沢のある黒い包装紙に赤いリボンのかった小さな箱だった。

「つき返すなよ……」

先に、けん制された。

「そんなことは、しないけど……開けていいか？」

「ああ」

意外とていねいに包装紙をはがして蓋をあげると、中には、ちいさな星型のチョコレートが五つ並んでいた。

「かわいいな」

「当たり前だ。俺がつくつたんだから」

言われて、彰はなんとか平気な顔をしようと努力した。

しかし、たまらず吹き出した。

この大男が、ちまちまとチョコレートを湯煎でとかして、型にいられている姿を想像すると、笑いがとまらなくなっていた。

「おまえがママなのは知ってるけど……！」

「るせーなあ。上の妹がどうしても持っていく、っていうからよ。

泣きつかれちゃ、どうしようもなくて……いいか、食べよ。夜中の一時までかかって仕上げたんだ」

「こ、この包装もか！」

「ばこつ、と頭を殴られる。

笑いすぎて、腹がいたい。

酸素不足ではあはあ言いながら、やっと笑いの発作をおさめていた。

そうして、一粒つまんで口に入れた。

ただチョコレートを固めたものではなかった。

中身は、オレンジのリキュール漬けだった。

「どうだ？」

「おまえ、妹って小学五年だろ……リキュール効きすぎ！」

「やば……」

隣でふたつめを口にに入れる彰を見下ろして、宇田川はポケットに両手をつっこむ。

「いちど、やりたかったんだ……女にだけ、こんなチャンスがあるのは、癪にさわる。ずっと……やりたくても、できなかつたからな」それを聞いて、彰はしずかに微笑む。

「おまえも、味見しておけば。これ、ぜんぶ食ったら酔っぱらうよ」差し出された箱から、宇田川もひとつつまんでいた。

「……甘え！」

吠えていた。

そして三つ目は、おなじクラスの副委員長、飯島奈津美からだった。

部活に行こうとしていたところを、呼びとめられていた。

普段から、女子のなかではよく喋る相手だった。

性格があっさりしていて、ちょっときつくて、頭がよくて、美人だ。そのくせ、女っぽいところをあまり感じさせないから、彰だけでなくクラスの男子はみな、話しやすく思っていた。

その彼女が、いまは不安いっぱいの表情で彰をよびとめる。

どんなに鈍感なヤツでも、気づかないわけがなかった。

「これ……！」

差し出された包みを、彰はしばらく見つめていた。

「いらない、って言わないでね！ お願いだから！ あたし、本当はすっごい初心者なんだから！ 朝からもう、生きた心地しなかつ

「たんだから！」

その言い方が、いつもに似合わずかわいくて、彰はつい笑ってしまった。

上目づかいで見上げる奈津美の瞳には、ぷ、と指でつついたらこぼれそうな涙がたまっていた。

「……ごめん」

真面目に反省した。

「うれしいよ……でも、俺は」

「聞きたくない〜〜！ 趣味じゃないとか、つきあってるコがいるとか、好きなコがいるとか、聞きたくない〜〜！」

「全部じぶんで言うなよ」

「ついでに、もっといいヤツがいる、とかそういうのもなし！」

「じゃあ、俺はなにを言えばいいんだよ」

面白いやつだなあ、と彰は思う。

あの飯島奈津美に、こんなお茶目なところがあるとは思わなかった。

「……ありがとう、って言うってうけとってよ」

ぼろぼろ、と涙がこぼれおちていた。

彰はそのとおりにした。

「飯島……胸はかせないけど、背中は貸してやるよ」

うん、と奈津美は彰の背中にひたいをつけて、しばらく泣いていた。

奈津美をしがみつかせたまま、彰はその大きな包みを開く。なかに入っていたのは、イニシャルが刺繍されたスポーツタオルとチヨコレート。

「これ、使っよ……でも、ごめん」

「うっん……あたしって、黙ってらんないから。でも、友達でいて「わかった」

本当にほしいものは、手にはいらぬ。

彰は奈津美によびとめられる前、美術室でおなじように告白され

ている悠一を見つけていた。

どういう顛末になったかは知らないが、真っ赤に頬をそめていた悠一はまんざらでもなさそうに見えた。

たとえそうだとしても、彰にはどうしようもない。

悠一との距離が近くなればなるほど、彰は手も足もでなくなっていた。

彰がどれほど特別扱いをしても、なにを差し出しても、悠一はまったく気がつかない。

それは、そうだろう。

同性同士というのは、恋愛の対象にもならない。

彰の恋のあいてが少女だったら、いいかげん気がついていたはずだ。

(せいぜい、親友どまりってところか)

そして、宇田川はつらかったろうな、とあらためて済まない気持ちになっていた。

その夜、彰は悠一から「彼女ができた」と報告の電話を受けた。

表面上はおだやかに、一緒になって喜んでやり、冷やかしてもしてやったが……電話を切ったあとは自室にこもって朝になるまで、由紀子と呼んでも出てこなかった。

そうして、彼女ができてしまった悠一とはほとんど会わないままの春休みをすごした。

部活で道場に出ても、もう、悠一と帰ることがなくなった。

バレンタインデーに告白したのは、おなじ美術部の生徒だったからだ。

宇田川もいない。

彼は、終業式のあとすぐに、転校していった。

これほど寂しい春休みは、彰は初めてだった。そして……春休みが過ぎてクラス編成が発表されると、彰は運命の神様はいらない、と思った。本気で。

進学コースをはずれた悠一は、一般クラスに編入されていた。この三年間ではじめて同じクラスになれたが、彰はすなおに喜べない。

悠一の彼女も、おなじクラスだったからだ。

(これを……俺は一年見続けるのか)

正直いって、自信がなかった。

仲のいい二人を見ている自信がないのではない。

どうみても、不釣り合いだからだ。

悠一が選んだのでなければ、ある意味ぶちこわしたいぐらいだ。

どうせ諦めなければならぬのなら、もっと納得のいく相手とつきあつて欲しかった。

見た目だけが砂糖菓子みたいに甘い女ではなく……もうすこし、芯のある女だったら、彰も諦めやすかった。

飯島奈津美のような。

その彼女も、おなじクラスだった。

「ね、萩生くん。いっしょにクラス委員に立候補しない?」

面倒臭え、という彰の意志を無視して立候補すると、あっさり当選していた。

「おまえ、三年のクラス委員なんて面倒ばっかりじゃねえか」

「いいの、いいの。あたし、萩生くんはけっこう面倒見いいと思うから。それに、こうしとけばおかしなムシはつかないでしょ?」

奈津美のいう「おかしなムシ」が誰のことだか、しばらくわからなかったが……一か月が経つころには、さすがに彰にもわかっていった。

悠一の彼女であるところの、近藤亜希子のことだった。

外側だけが砂糖菓子かと思ったら、中身まで砂糖菓子だった。

彰が、いちばん嫌いなタイプだ。

彼女自身は悠一を独占しておきながら、じぶんは「誰でも食べていいよ」とネオンサインを光らせて歩いている。

男はみんな、自分になびくとも思っているらしい。

たしかに、見た目はとても可愛いうさぎのぬいぐるみのような少女だ。

髪はふわふわ、肩のところでカールしていて、顔立ちもじゅうぶん観賞に耐えうる。いろが白くて、華奢で、ちいさい。

しかし、彰には困ったことにその背後にある傲慢さと男をなめてかかった様子が透けてみえる。

見ていて、彰は悠一に苛々した。

悠一はただ困ったように笑っばかりで、いいように引きずりまわされている格好だ。

たまりかねて、部活の途中につかまえて、つい、言った。

このところ、悠一とは亜希子が邪魔になってまともに話もしていない。

おなじクラスになってからのほうが、一日のうちで話す時間は短いぐらいだ。

「湊、あいつを、どうにかしろ」

「……え？」

「近藤亜希子……好きなら好きで、あんな風にフラフラさせておくなよ」

彰を見上げる悠一の顔は、どこかぼんやりとして、寂しそうだった。

「でも……彼女はそれで結構しあわせそうだし。僕も気がらくなんだ」

なんだ、それは。

と彰は思わずつつこみそうになった。

「おまえ……本当に、あいつが好きなのか？」

悠一は、その質問をはぐらかすように言っていた。

「わからない。好きって、どんな感じなのかわからない。それに、

彼女がああいう風にするのは、僕にあてつけてるんだよ。僕が煮え切らないから……でも、僕にはどうすれば、その、そういう気になるのかわからなくて。彰はさ、どういつ時にキスしたいか思っわけ？」

真顔で訊かれて……答えにつまる。

それを、おまえが訊くのか、と言ってやりたかった。

好きなら、そばにいたいし、キスもしたくなる。

それだけでは終わらずに、あいてのすべてが欲しくなる。

寂しそうにしているとき、嬉しそうにしているとき、困っているとき……キスひとつで解決するなら、何度でもしてやりたくなるものだ。

「彰は、経験あるよね。だから、教えてよ」

経験があるなどと、悠一に言った覚えはないが……確かにあるので、反論しなかった。

「そのときに、よるよ……なんとなく、そんな雰囲気になってする時もあるし。なんにも言っちゃれそうにないときに、する事もある。まあ、相手が嫌がりそうにないなら、だけどな」

その言葉に、なぜか悠一は泣きそうな表情になっていた。

「じゃあ……彰はさ」

そこへ、元凶がいきなり飛び込んできた。

「ゆづいちくくん!!」

こつこつ、周囲の空気を読めないところが、彰をイラつかせる一つだ。

悠一がなにをやっていようと、誰といようと、おかまいなしに自分の都合だけで動く。それをまた、悠一がなにも言わずにいるから、さらにイラつく。

「とにかく、どうにかしろ。おまえの好みだから俺はこれ以上なにも言わない」

くるり、と背中をむけて、彰は道場にむかった。

しかし、なにも言わないどころの話ではなくなっていた。
その会話をした翌日から、どういつわけか近藤亜希子の視線が、
彰に突き刺さるようになっていた。

むこうは、せいぜい熱い視線のつもりだろうが、彰は基本的になんとも思っていない相手に対しては冷淡だ。ややこしい事になりそうな相手には、さらに冷淡だ。

それに敏感に反応したのは、奈津美だった。

クラス委員としてしょっちゅう一緒にいるから、嫌でも気づいた。
「萩生くん……わかつてる？」

「なにが」

「どこかの馬鹿が、身の程知らずにお熱になってるよ」

昼休みに卒業アルバムの写真スケジュールの打ち合わせをしていたら、とつぜん身をのりだしてきて、耳元でこっそりと囁かれる。

一瞬、ことがなかった。

「おまえ……飯島、言い方がきつすぎる」

あら、とおどけて笑っていた。

「だって、あたしあの女がきらいだもん。中学から一緒だけど、全然かわってない」

過去に、よほどのことがあつたらしい。

三年連続でクラスの副委員長をやっているから、奈津美はかなり公平にもものを見るタイプだと思っていた。彼女がここまで言うのを、初めてきいた。

「相手にするな。つきあつて飯島までがあのレベルに落ちることない」

「なんだけどさ……なぜか、男子はついフラフラっといくんだよ。どこがいいのかわからないけど」

それは、彰にもわからない。

「まあ、顔とか雰囲気とかは、かわいいんだらうけど、わかんない。それとも、ああいうタイプってほんとけない、って気にさせるのか

な

「……あいつのアレは、どうせ計算づくだ」

彰は言いきった。

奈津美は思わず目をまるくしていた。

「ひとのこと、言えないじゃない。萩生くんのほうが、よっぽどキツイよ」

笑いこぼるのを、彰は苦笑しながら見ていた。

確かに、容赦のないことを言ったと自分でも思う。

しかし、ただ女というだけで悠一のとりにいる自然さを思えば、これぐらいは許されてもいいだろう。なにも、仲を裂こうとするわけではないのだから。

実際、あの二人がなぜつきあっているのか、彰にはわからない。

どちらも、互いを大事には思っていないようなのだ。

あれが恋愛なら、あまりに安い。

むしろ彰と奈津美のほうが、よほど「恋愛」をしているように見えるはずだ。

彰は、奈津美をべつの意味で大事にしている。

恋にはならないが、彰は彼女が好きだった。告白されたから、気をつけて誤解をさせないようにしているが、それでも大事にしている。それを、奈津美は敏感に感じとって、とりあえずは満喫していた。

いまでも、彰のことが好きだが……いったん懐にはいつてしまうと、もう、男とか女とかがなくなってしまうのだ。

そういうところが、彰にはあった。

(かれの好きな子って、誰なんだろう……?)

いま、奈津美の知りたいことのトップは、それだった。

「どっちにしても、気をつけてね。狙った獲物は、ってタイプだから」

「狩猟許可を出した覚えは、俺にはないよ」

奈津美はまた、可笑しそうに笑いこぼっていた。

その日の放課後、委員会ですっかり遅くなってしまった彰は、部活へ行くために奈津美にあとをまかせて、急いで教室にもどっていった。

ガラリ、とドアを開けた瞬間、まわれ右をしたくなっていた。

彰の机のそばで、夕日を背負って立っているシルエットは、近藤亜希子のものだった。

ここで出ていくのはいいが、部活に遅れるために仕方なく彰はそちらへ歩いていく。

「なにか、用か」

めったに彰はこういう温度の低い声をださないが、このときは、ためらわなかった。

「つめたいんだから……」

甘ったるい声に、正直に鳥肌をたてていた。

「俺が、何かおまえにやさしくする理由でもあるのか？」

相手の顔もみずに、学生鞆に机の中身をつっこんでいく。

「ゆういちくんのこと、相談したかったのに」

悠一の名前には、さすがに彰も反応する。

無言で、相手の顔を見た。

そして……後悔した。

無邪気を装っているが、まるで舌舐めずりする肉食獣のような表情だった。

「ゆういちくんから、聞いてちゃった。キスの、は・な・し」

瞬間、手にもっている教科書を投げつけたいほどの嫌悪感を覚えていた。

「そんでね……あたしにも、教えてほしいんだけど」

彰は、過去いちども女にたいして手をあげたことはない。

しかし、このときばかりは自制するのに苦労した。

これほど悠一にたいして馬鹿にした行為もない。いったい、この女のどこに誠実さという文字があるのか、知りたかった。

そこへ、奈津美がプリントの束を抱えて教室に入ってきた。勘のいい彼女は、その場の雰囲気をとっさに読みとっていた。さっと顔色を変えると、抱えたプリントをそばの机に投げ捨てて、ツカツカと近づいてくる。

「……飯島！」

彰が、はっとして手をのばしたときには、遅かった。

ものすごい手首のスナップが効いた平手が、亜希子の頬で炸裂していた。

その場の空気が、凍りつく。

一拍おいて……亜希子が頬を手でおさえながら、彰に抱きつこうと身を寄せかけた。

それへ、奈津美がふたたび手をあげる。

「もう一発！」

「馬鹿！ やめろ……！」

背後から、両手をつかんで抱きすくめる形になっていた。

「はなしてよ！ こんな女、殴られなきゃわかんないんだから！」

「わからなくていい！ 俺が知ってる……いいから、落ち着け」

奈津美のからだは、怒りのために震えていた。涙さえ、滲んでいた。

「あんたのせいで、あたしの親友がどんな思いをしたと思ってるのよ！」

そういう事情が、奈津美の背景にあったことを、初めて知った。

「もういい……な？」

怒りがおさまらないらしい奈津美を懐にいれたまま、彰が亜希子を見て言った。

「つぎは、俺が殴る……出ていけ」

亜希子のほっぺは、頬をおさえたまま、泣きながら教室を飛び出した。

やっと手を離してやると、くるり、と奈津美がふりむいて「馬鹿！」と言っていた。

「止めたりしないですよ！ あと、一、二発はぶっ叩いてやりたかったのに！」

いかにも、手ぐすねひいてチャンスを待っていたらしい様子に、彰は苦笑する。

それにしても、すごい平手打ちだった。

あれでは、翌日あいての顔は「おたふく」だろう。

「手をみせる……」

「え？」

「おまえの右手……」

自分のてのひらの上で広げさせた奈津美の手は、真っ赤になって腫れていた。

彰は、ため息をついて、奈津美を座らせた。

「これは、しばらく痛いぞ……」

そつと、机のうえで手首からゆびさきまでの筋を確かめるように、マッサージしてやる。

よほど上手く叩いたらしい。

腫れた痛みのほかは、どこも大丈夫なようで、ほつとする。

「保健室で、シップしてもらえ」

「……うん」

奈津美は、彰の手をみていた。

指のながい、器用そうなきれいな手だった。

とても、大きい。

そつと視線をうつすと、うつむき加減の顔があった。

「ねえ……萩生くんの好きなコって、だれ？」

「……知りたいのか」

「うん。誰にもいわないから」

彰は微笑しながら、言っていた。

「……あいては、男だ」

「ふうん……そうなんだ」

あまりにもさりげなく言われたために、奈津美は納得したような

返事をして、え、と顔をあげていた。

「あ、あぶない……そのままスルーするとこだったじゃない！」

「俺のほうが、驚いたよ。まさか、ふうん、なんて言うとは思わなかった」

さりげなく、彰が奈津美の手をはなす。

気持ち悪さにふりはられるよりは、まだ。

しかし奈津美は催促した。

「あ、もうちょっと、やって。気持ちいいから。ついでに、肩もおまえな、と言ってから彰は立ち上がると奈津美の背後に立って、言われた通りに肩をマッサージしてやる。」

「俺に、こんなことさせるのは、母親以外じゃおまえぐらいだよ。なんとも形容しがたい気分で、つぶやく。」

「ねえ……じゃあさ、あたしのライバルって男のひとだったんだ」

「……そうなるな」

うーん、気持ちいい。と奈津美は目をとじていた。

「ちえっ！そんじゃ、ぜんぜん勝ち目はないじゃん。なんかムカつくなあ！」

「だから、とりあえず俺ぐらい安全な男はいない」

どつりで、彰のそばにいるのが心地よかつたはずだ、と奈津美は思う。

どういう意味でも男女がくっついていれば自然と発生する磁力のよくなものが、彰とはなかつた。あれば、またチャンスも出来ただろうが、なければ一緒にいても兄妹みたいなもので、生臭くはならない。

「ねえ、その人は知ってるの？」

「いや……知らない」

彰の、ひくい声が頭上から降ってくる。

「つらいね」

言われて、ただ微笑していた。

？

6月にはいって、そろそろ梅雨入りかと思えるようなはっきりしない天気の日がつづいていた。

うつとおしいと言えば、放課後の平手事件はいつのまにか周囲に知られていた。

おそらく、亜希子の口から出たのだろう。

悠一と亜希子はいいかかわらずで、変わったといえば、亜希子がなにを言いつけたのか、悠一が彰とは接触してこなくなったことだ。

もうひとつ、あの放課後の事件くらい、彰と奈津美がクラス公認になった。

彰は、奈津美を心配して「好きな男ができたら、すぐに言え」と釘をさしておいた。

が、言われた本人はケロリとしたものだ。

あたしが隠れ蓑になってあげる、とまで言っただけだ。

そう言われても……こればかりは、彰もなにをすればいいのかわからない。

とりあえず、礼だけ言っておいた。

土曜日の朝、由紀子が雨だというのに気合いのはいったパンツスーツを着て、小型のボストンバッグ片手に彰に言った。

「休みだからって、わるい遊びをしないでね」

北条との、温泉一泊デートだった。

この夫婦は、会えない時間をこうやって、埋めている。彰にとっては、嬉しいことだった。

離ればなれになってから、由紀子はいつそう美しくなったように見える。

まるで、もういちど恋人時代に還ったかのように、潑刺として、

輝いている。

息子の眼からみても、眩しいほどだ。

「お天気、良ければもっと楽しいだろうに」

彰が玄関でいうと、ふふふん、と由紀子が微笑とともに首をふっていた。

「雨も、素敵なのよ！ 子供にやわかりませんとも！」

苦笑して、見送った。

そのあと、彰は部屋の掃除をしたり、本の整理をしたりして午前中をすごした。

彰はもともと、一人でいることが辛くない。

なにかしら用事をみつけては片づけたり、何もなければ、ただ音楽でも聞きながら本を読む。

昼は適当に料理をして、午後からは英語の原書版の推理小説を読んでいた。

さすがに辞書片手だが、彰の英語の読解力はこういうところから培われている。

もともとは、父親と一緒に住んでいたころにとっていた英字新聞がスタートだった。

雨はやむ気配もなく、一日ずっと降りつづいていた。

どんなに明るい音楽をかけても、気が滅入ってしかたがなかった。いつだったか、悠一が遊びにきたときのことを思い出す。

DVDを見たいというから、一緒に選んでいた。サスペンスがいとか、コメディがいいとか、そんな事も話したと思う。包丁ひとつ握ったことのない箱入り息子だということも、そのとき知った。

そして……ふとしたはずみに顔を上げた悠一の、吐息がかかるほどの近さに、思わず彰は身体をひいた。

あのままでいたら、くちづけていただろう。

それほど、危うい距離だった。

どんなときに、キスをしたくなるかなんて、わかるわけがない。それは、突然やってくるからだ。

読んでいた本のページを折って、彰は閉じた。

悠一のことを想うだけで、彰はどうしようもなくなる。避けられはじめてからは、いっそう、求めて自分をもてあます。

悠一は、怒っているのだろう。

彰にしたところで、自分がつきあっている相手が恥をかかされれば、怒るにきまっている。それが、あんな女だとしても。

あんな、大事にしてくれない女のどこがいいのか、わからない。

(俺に気づけよ……俺なら、どんなにでも大事にしてやるのに)

届かない想いだということは、わかっていても、そう願わずにはいられなかった。

夕方、ちよつと買い物に出かけたあとは、彰はけつきよく一日中家の中でした。

九時頃に両親から電話があつてしばらく話をしたあと、買ったばかりのDVDをセットして、眠気が訪れるまでの時間をつぶすことにした。

悠一は、雨に濡れそぼって立っていた。

もう、何時間こうしているのか、わからない。

傘も、上着も、忘れてとびだしたのだ。

歩いて……歩いて。

気がついたら、見覚えのある駅が見えていて、そして今は真夜中の交差点でどこへ行けばいいのかわからずに、立ちすくんでいた。

周囲は真つ暗で、道をきくにも人通りが絶えている。

交差点の信号は、黄色く点滅しているだけだった。

真つ暗な路面にそのライトが映っていた。

雨宿りができるような軒下もない。

マンシヨンの公園から張り出した樹木の枝からは、大粒になった雨のしずくが落ちてきて、悠一のからだをさらに濡らす。

濡れた衣服が、悠一の体温をうばって、寒そうに両手で自分を抱

いていた。

一、二度しか来たことのない場所で、悠一は方向を見失っていた。それを、悠一はまるで自分自身のことのように思った。どこへ向かえばいいのかわからない。

行きたい場所があるのに、行ってもいいのかわからない。

(……彰)

会いたい……会いたくて、たまらない。

つめたい雨とはべつの雫が、悠一の瞳からあふれていた。

そしてとうとう、たった一つ持って出てきた携帯を取り出ししていた。

彰がいま、誰のものでも構わなかった。

(キスを、してた……)

放課後の道場で、男に抱かれてキスをしていた。

すごく綺麗なキスだった。

それを、待ちくたびれた悠一は道場まで迎えにいつて、扉の隙間から目撃して……自分でもわからない衝撃に、黙ってひとりで家に帰った。

なぜ、そんなに落ち込むのかわからなかった。

どうしてこんなにも辛いのか、わからなかった。

ただ寂しくて……悲しかった。

そして反動のように、告白された勢いで近藤亜希子とつきあった。ふいに、今日の出来事が脳裏をかすめて、悠一はふたたび吐き気に襲われた。

悠一は祈るような気持ちで、リダイヤルボタンを押していた。

「……彰……」

意外にも、すぐに電話がつながって、泣きたいほど懐かしい声が聞こえた。

「……湊か？ どうしたんだ？」

「いま……どこにいるのか、わからない。この交差点を、僕はどっちに曲がれば彰のところへ行けるの？」

激しくなってくる雨脚のなか、悠一は途方にくれていた。

冷え切った身体を湯船につけて、悠一はしずかに泣いていた。
彰はすぐに、とんできた。

息がきれるほどに走ってきた彰に呼ばれた瞬間、悠一はやっと自分の気持ちに気づいた。

（好きだったんだ……）

つめたく凍えた身体にまわされた彰の腕の温度が、暖かった。

なにも聞かない彰につれられて家にくると無人で、悠一は問答無用で風呂につっこまれた。

凍えた脚先から、じわじわとお湯の温度がしみこんでくる。

感覚がもどつてくると、逆に亜希子に触れられた部分が気になって、悠一は身体じゅうをゴシゴシこすっていた。

まるで、痴漢にあった少女のように感じていた。

その部分に、虫でも這っているかのようにムズムズして、気持ちが悪かった。

執拗にこすっていると、ノックの音がして、ドアの外から声がする。

「大丈夫か？ すこしは暖まった？」

うん、と答えて……茹だっている自分に気がついた。

「もう、出るつもり」

「着替え、置いてあるからな」

バスタブの栓をぬいてから、悠一はふかふかのバスタオルで身体を拭う。脱衣所には、真新しい下着と、洗濯したてのスウェットの上下が置いてあった。洗濯機がまわっていて、悠一の濡れた衣服はその中だった。

身につけると、すこし大きかった。

そっと、襟の部分をつかんで顔を埋めてみる。

彰の匂いがするのを期待して。

濡れた髪にタオルをかぶってリビングへ行くと、彰は台所でこと作業をしていた。

あまい、ミルクと紅茶の香りがしていた。

「……彰」

ちよつと振り向いて、座ってる、と言う。

それでも、悠一はそこに立って、彰を見つめていた。

「彰はいま、飯島とつきあってるの？」

苦笑する気配がした。

「あれは、違うよ。いちいち訂正してまわるのが面倒だ、ってんで飯島とふたりそのままにしているだけだよ」

振り向いたときには、煮出し紅茶のはいったおおぶりのカップを持っていた。

それを受けとってソファに座る。

「髪、ちゃんと拭けよ。風邪ひくぞ」

飲んでいるのを確かめて、とりあげたタオルで悠一の濡れた髪をやさしく拭ってくれた。

「じゃあ……あの、宇田川っていうやつと、遠距離なんだ」

びたり、と手がとまっていた。

タオルもそのままに、離れていく気配がした。

まいったな、と呟く声に悠一は、泣きそうになっていた。

「僕、べつに……なに言うつもりもないから！ 彰が好きなんだから、仕方がないと思うし……でも、だけど」

ぐるりとソファをまわりこんで、向かい側に座った彰を見る。

その表情はひどく複雑で、後ろめたそうだった。

「だけど……？」

「も、もし良かったら……あいつが戻ってくるまでの間だけでも、僕といってくれない？」

悠一としては、そういうのが精いっぱいだった。

大学生になって、彰がまたあの男のところへ行くのは仕方がない。だが、悠一が行きたかったところは、彰だった。

考えて……それしかないような気がしたのだ。

彰の眼が怖いほど光っていたが、なにも言わない。

あわてて、悠一は言葉をつなぐ。

「今日……きのう、近藤の家に行ったんだ。誰もいなくて、それで……なんていうか、触られて、キスされて……気持ち悪くて。駄目だったんだ。なんか、又メ又メして、我慢できなくて、吐いた」

眉間にしわを寄せたまま、器用に彰の片眉がはねあがっていた。

「なんだって？」

「近藤は半狂乱になって怒るし……僕はもう、おんなじ空気を吸ってるのも嫌で、逃げ出して、でも財布とか全部忘れてきてずっと歩いて、気がついたらあの交差点で迷ってて。彰に会いたかった……だから、あのとき呼ばれてふりむいて、僕はわかった。ずっと、彰のことが好きだった、って。でも……彰にはもう好きじゃつがいて」

「だまれ、馬鹿！」

思わず、彰はそう叫んでさえぎった。

びくり、と悠一は固まっていた。

あれを、見ていたのか、と思う。

その誤解をどうやってほぐせばいいのだろう。それよりも、まるで自分を安物のように売りにだす馬鹿な考えを、どうたしなめればいいのかわからなかった。

そして、悠一にそこまで言わせてしまった自分に腹が立った。

悠一はぎゅっと目をとじていた。

こういうときに、言葉なんかいらさない。

彰はゆっくり近づいて、頭をやさしく両手で包んでいた。

「馬鹿……それいじょう、言うな」

悠一のとなりに膝をついて、のしかかるように身体を傾けてキスをしていた。

最初は、確かめるように小さなキスをひとつ。

抵抗しないとわかると、ついにむように二度、三度……。

そうして、ちよっと顔をのぞきこんで腕をまわすと、逃げられな

いように抱きすくめて片手で顎をとらえて、深くくちづけた。微かにひらいた唇から、そつと舌を差し込んで、悠一のそれを誘ってみる。

ためらいがちに差し込まれるのを、やさしく吸っていた。

腕の中で、ゆっくりと力をぬいていく悠一をやつと解放して、彰は微笑んだ。

「俺が、誰を好きだった？ 三年越しの恋だよ……湊。美術室をのぞくだけで一年使った。一度ぐらいよその男とキスしたからって、怒るな。もう、二度としないから。約束する」

「……彰」

「俺はずつと、お前が好きだったんだ」

「ほんとに？」

「でなきゃ、あんなに大事に扱ったりしないよ」

確かに、思い返せばその通りだと悠一は思う。いつだって、その他大勢とは違う態度で彰はいたし、その特別扱いが嬉しかったのだ。「も一回、してよ」

「……いいよ」

また、やさしいキスをする。

「へんなの……近藤とは、あんなに気持ち悪かったのに」

「ほかには、どんな事をされた」

「いっぱい……触られたし、触らせられた。すごく、気持ち悪かった。僕はあるなの見たくなかったし」

それを聞いて、彰はさすがに彼女に同情した。

「こうまで言われたら、彰なら、とうぶん立ち直れない。」

「わかった……俺がぜんぶ、綺麗にしてやる。そのかわり、もう一度言ってくれよ」

悠一の口から、何度でも聞きたい言葉。

何度でも、言ってやりたい言葉。

「……好き」

その瞬間、彰は世界中を手に入れたように感じていた。

エピソード

あのとときの雨が、こんなにやさしく表現されているとは、彰も思わなかった。

まるで油絵のような重厚な感触があるのに、全体に透明でやさしく、夜の雨を描いているのに、暖かった。

ある賞にだした悠一の絵は、グランプリこそ逃したものの、入選した。

タイトルは「交差点」

高校生の入選は、その賞では初めてだった。

「卒業したら、一緒に暮らすんだってな」

背後から声がして、彰はしずかに微笑した。

「宇田川か」

振り向くと、そこに187センチに成長した宇田川がうつそりと立っていた。

高校のバスケットの秋のインターハイの出場ついでに、寄ったらしい。

美術展には不似合いなジャージの上下に、スポーツバッグという姿だった。

「来るとは、思わなかった」

知らせてはあったが、来ることを期待していなかった。

「来りゃあ、おまえに会えるだろうと思ってな……言つとくが、俺はあいつの顔は見たくねえぞ」

どうやっても、根本的にこの二人は合わないらしいと悟って、彰も無理に仲をとりもつ努力はやめていた。

宇田川保は、彰の友人。

そのかわりに、悠一もあいてが宇田川のと看だけは、彰が会つてもなにも言わないだけの分別をつけていた。

それ以外のときの悠一の独占欲は、すごい。

飯島奈津美と悠一は、それで一度ならず大ゲンカをしているほどだ。

もっとも、喧嘩になるほど互いに認め合っているし、そういうときの彰はどちらの肩ももたないでいる。下手に仲裁でもしようものなら、矛先がこつちに向いてどうにもならなくなるからだ。

「まったく……なんだって、あんな我儘なやつと」

「言うなよ」

確かに、悠一は彰にたいして我儘だ。

が、それでもいいと彰は思っていた。

独占されても、苦にならない。

それに……悠一には彰しかいないのだ。

悠一にとって自分がゲイだという事実を家族に知られることほど、恐ろしいものはない。

彰のほうは、その点恵まれていた。

さすがに、孫の顔が拝めないと落胆はしたらしいが、それでも受け入れてくれた。

奈津美もその一人だ。

それだけいれば、充分だと彰は思う。

だから、悠一の心細さも恐怖も……彰がいつしよに背負ってやるつもりだった。

「しっかし……もうちょっと明るい絵のほうか、俺はいいけどな」

「……思い出の絵なんだよ」

「おまえらのか」

「そう」

悠一が、彰への道を見つけた交差点。

彰が、悠一を見つけた交差点。

結局、あの夜はただ抱き合って眠るだけだった。

彰にもその方面の知識は乏しかったし、悠一にいたっては皆無に等しかった。

それでも互いにちゃんと感じたし、満足した。

幸せな夜だった。

「じゃ、しょうがねえ……これ以上くさすのはやめておくか」

宇田川は、あっさり引き下がった。

そして、じゃあな、と言った。

「もう、帰るのか？」

「俺は、おまえの顔を見に来たんであって、絵なんか鑑賞しにきたんじゃないよ。それにこれから、練習だ」

彰は、会場をでていく宇田川を目で追って、小さく肩をすくめていた。

エピソード（後書き）

下手です……（泣）

いまのわたしが読み返すと、視点はバラバラだし、改行はやたら多いし、なにもかも恥ずかしいです。こんなに「恥」のつまった作品も珍しい。

しかし、まあ、少なくとも「へったくそお〜〜！」と言えるぐらいには成長しているんじゃないかと思えます。そう思っただけです……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7531m/>

真夜中の交差点

2010年10月8日14時01分発行